

首都圏段戸会 会報

令和5年4月
第49号

発行責任者
首都圏段戸会
会長
内山田 邦夫
編集者
広報担当
織田 利彦

第50回 総会・懇親会報告

高58回 石川 航己

2022年10月29日（土）、アルカディア市ヶ谷にて第50回首都圏段戸会総会が開催されました。爽やかな秋晴れのもと、首都圏在住者を中心に107名が会場に集まりました。オンラインでの参加者13名と合わせ120名の同窓生が参加しました。まだ新型コロナウイルスの影響が残る中ではありましたが、今回も幅広い年代の方々の参加があり、以前と変わらぬ賑わいを見せました。

冒頭、内山田邦夫会長（高21）の挨拶では、新型コロナウイルスの脅威がまだ残る中で、今回の総会・懇親会が開催できたのは世話人一同の努力と工夫があることを強調されました。続いて、愛知県から会場に駆けつけた岡崎高校同窓会長の細井土夫さんより挨拶をいただきました。

岡崎高校校長の柴田悦己先生は校長室からリモートで挨拶され、弁論部がディ

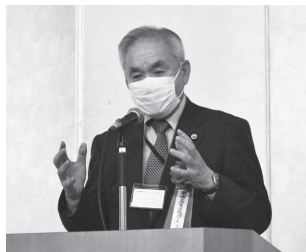


内山田邦夫会長

講演会は三井住友信託銀行取締役副社長の野口謙吾さん（高33）が「未来創造につながる起業家精神」というタイトルで講演されました。今までの経験や今注目していることなどいろいろ



柴田悦己学校長



細井土夫同窓会長

ベートで全国制覇したことやコーラス部の全日本合唱コンクール全国大会に出場など、岡高生の文武両面での活躍を紹介されました。会計報告では堀内友二さん（高32）より令和3年度の決算内容の説明があり、単年度の収支が赤字となっていました。報告されました。戸田譲三さん（高25）より会計監査報告が行われ、参加者の拍手によって令和3年度決算は承認されました。

ろなお話をしていたが、「一億総養殖系…エサをもらって幸せな人生を送る」という言葉が私には非常に印象に残りました。つついかな道を選びがちですが、自分で生き抜く力を鍛えることも必要と気がつかされた。講演後、段戸サークルの紹介と段戸音楽会による「新日本紀行」の演奏が行われました。最後に校歌斉唱と元応援部員の福山透さん（高19、前首都圏段戸会会長）のエールにより総会が無事に終了しました。



講演 野口謙吾さん（高33）

2019年以来3年ぶりとなった会場での対面の懇親会は新型コロナウイルスの蔓延防止に配慮し、着席してのマスク飲食の形式で行いました。名刺交換コーナーもありましたが、着席して語り合っている方が多かった印象です。大先輩から同級の友人、まだ高校を卒業して間もない若手まで、今年も多くの人に会うことができました。「岡崎高校の卒業生」という共通点があれば会えないような異業種や世代の違う方々と出会い、互いに刺激を与え合うことができる仲間がいることが首都圏段戸会の良いところだと改めて感じました。井上由美子副会長（高34）の挨拶で懇親会も無事に閉会しました。次回の第51回総会・懇親会は10月28日（土）開催の予定です。多くの方々が会場に集まるのを楽しみにしています。

「首都圏段戸会」は愛知県立岡崎高等学校の首都圏同窓会です。



公式ホームページ

<http://dandokai.o.oo7.jp/>

パソコンやスマートフォンが不得意な方も、お子さんやお孫さんに操作を頼んで、一度ホームページを訪ねてみて下さい

首都圏段戸会

検索

第51回首都圏段戸会総会・懇親会予定

〔日時〕 令和5年10月28日（土） 13：00～17：00

〔場所〕 アルカディア市ヶ谷（私学会館）

……JR、地下鉄 市ヶ谷駅から徒歩2分

段戸サークルのお問合せ先

皆さまの参加をお待ちしています！

「段戸囲碁会」

（幹事：早川 慎吾 高32回） hayakawa@a00.itscom.net

「段戸音楽会」

（幹事：石川 航己 高58回） koki-ishikawa.49@gmail.com

「段戸句会」

（幹事：野村 親信 高16回） nomurac@jcom.home.ne.jp

「段戸山の会」

（幹事：石川 定雄 高30回） s-ishikawa44@b04.itscom.net

「胃文化交流会」

（幹事：小出 一典 高33回） kazunori.koide72@gmail.com

「副業推進会」

（幹事：加藤 研一 高30回） katosoke@gmail.com

総会出席者の一言

矢作川の夕映え

高7回 杉山 修

高7回組から参加の私たち4名が年長者順で2番目の座席を占めることになっていたことが驚きでした。昭和28年入学はついこの間の出来事の様にも思えますが、数えてみると70年が経ってしまったわけで、真に「光陰矢の如し」を実感したひと時でした。コロナ禍のこともあってか、年長者の座席で多くの常連の知り合いの顔が見られなかったのは寂しいことでしたが、若い年代の方々から声をかけて頂き、戦争中のひもじかった生活や登校途中に艦載機の襲撃を受けて九死に一生を得た恐ろしい体験など、日頃話す機会の少なくなった戦中の出来事に耳を傾けて頂けたのは同窓会ならではの喜びでした。どんなことがあっても戦争をしない国であって欲しいとの思いを新たにしました。



高7回同級生（筆者は右から2人目）

戦争末期、昭和20年1月に起きた三河地震の惨事の記憶を話しても参加者の誰とも話を共有できなかったこと
も驚きで、死者数2千人以上と言われた大地震の体験が、戦時下の物資不足の中で住処を失い、防空壕の中で過ごした一年間がどんなに辛い毎日であったか、

語り継がれなくなる時の移りを変え残念に思いました。

私たち首都圏段戸会高7回同期生は、コロナ禍の騒ぎが始まるや、いち早くZoomを利用してOnlineの同期会を立ち上げ、偶数月の土曜日定例で開催を続けており、若手の皆さんに負けじとデジタル時代を先取りして交流を深めています。同期だけに限らず年次を超えた交流が頻度を増してOnlineで段戸会全体の交流に広がり、デジタル化の先端を行く同窓会として誇れる事例になることを望んでいます。

最後の校歌斉唱では、矢作川の堤防に立つて夕映えを見ながら歌う自分の姿が頭に浮かんで、歌詞の一節一節が心に沁みて次回までの元気を得た気分でした。時節柄ご苦労されて開催されたであろう関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

高18回 幡本 裕

1966年3月卒業の私は高校2年の時に岡崎高校に転入学したのですが、同級生たちに温かく迎えていただきました。この首都圏段戸会にも2017年（古希年次）、世話人の清水久雄さんから誘いを受け、仲間に加えてもらいました。残念ながら新型コロナウイルス感染拡大のため一昨年の総会は中止、昨年はリアルとZoomのハイブリッド



高18回同級生（筆者は右側）

での開催でしたが、今回は第7波も下火になり、対面で開催できて皆さんほっとしたという感じでした。

総会では内山田会長と岡崎高校同窓会の細井会長の挨拶の後、講演会の野口謙吾氏のお話に久しぶりに啓発されました。年齢とともに性善説でも性悪説でもなく性情説に加担しがちな我が身に恥じ入ったところでした。総会と懇親会の後、段戸音楽会のメンバーによる「新日本紀行」、「花は咲く」などの曲が流れ、ピアノ、尺八と横笛、フルート、バイオリン、そして高18回の世話人の山内恵さんもキーボードの演奏に活躍され、感動しました。

私たちは昭和22年生まれが主で、戦後の団塊世代の先頭に立ち日本国憲法とも同期になります。野口氏も紹介されたウルマンの「青春とは心の若さである」、「ゴールドスミスの「大事なのは失敗から起き上がる事」などの言葉を肝に銘じて、またこの会に参加できることを励みに、時代の変化を常に起動してきた世代として、もう少し頑張って生きたいと思います。

高26回 内藤 勝之

会場開催に参加しました。着席での会食でしたが久しぶりに同窓生に会えて楽しいひと時を過ごすことができました。私は数年前から総会に参加しています。その前から首都圏段戸会のことには存じていましたが、何か遠慮していました。会社の後輩から「胃文化交流会」というのがあるから参加してみないかと誘われ、食いしん坊の私も参加して、それから総



高26回同級生（筆者は左から2人目）

会にも参加するようになりました。名簿を見てもいろいろな方が参加されているのを知り、縁は重要だなと思いました。

今回の野口さんの講演では最後に「青春とは心の若さである」という話があった、まったくその通りだと思いました。「元気があればなんでもできる」というイノキの言葉とともに高20回台としてはこれからも元気に生きていこうと思います。

「段戸音楽会」による富田勲さんの新日本紀行演奏もよかったし、伴奏で校歌を久しぶりに歌いました。3番の「進取の剣、堅忍の盾」のフレーズは当時登山部活動で山登りして苦しい時にはなぜか頭に浮かぶ言葉で、自然と当時が思い出されました。リモートで柴田校長先生から登山部も東海大会出場など大いにがんばっているとの紹介があり、うれしくなりました。

総会懇親会の後、2次会に数名ほどで行き、そこでも楽しい時間を過ごすことができました。総会を企画、運営された方々には本当に感謝いたします。

高32回 白田 亨

何故か毎年足が向かない首都圏段戸会なのですが（笑）、令和3年・4年と連荘で、しかも会場にて参加してみたい



高32回同級生（筆者は右側）

す（驚）。令和3年は同年度末の定年退職を控え、悶々としていた中で、影山さんの講演を拝聴し「工学的アプローチから生命論的アプローチ」なるライフシフトのアイデアに触れ、思わぬ気付きと癒やしを得ました。令和4年は野口さんの講演にて「養殖系人種」や「性情説」なる言葉に叱咤激励されると同時に、本当に不思議なのですが、前職の同僚や中学・大学の同窓生の先輩方ともお会いできる機会を得ました。足が向かなかった割には（笑）同期との再会に加え、思わぬ収穫の多い首都圏段戸会となったのです。

毎年参加を思いあぐねている方がいらっしやれば、「先ずは行ってみましょう！」と声をかけたくなるのです。首都圏段戸会には思いがけない懐の深さで、あなたに癒やしと勇気を与えてくれる場所になると思います。野口さんの講演でも触れられた、故ステイブ・ジョブス氏が語った「Connecting the dots」の機会がここにはある様に思えるのです。

高46回 竹内 達也

約20数年振りに首都圏段戸会に参加させて頂きました。前回は大学の体育会系の繋がりで加藤先輩にお誘いを頂き、今回は講演頂いた野口先輩に仕事関連で接点を持たせて頂いたことが参加の契機に

なりました。同級生とは時折会いますが、学年を超えた同窓の先輩・後輩との場合は非常に貴重であり、岡高・地元ネタを共有し交流を深めつつ、多様な経験や視点を皆様から教えて頂き大変楽しませて頂きました。

事務局の皆様には、ご多忙にも関わらず、このような機会を設けて頂いたことに改めて御礼申し上げます。

私は現在、大企業や官公庁向けの戦略立案や組織改革のコンサルティングに従事しております。最近若手と飲む機会があり初めて気付いたのですが、岡高生が社内にも複数人数在籍していました。私が加藤先輩や野口先輩からお誘い頂いたように、私も今後は社内の岡高生を首都圏段戸会に誘いたいと思います。

なお、岡高ネタに関して思うのですが、近い世代で必ず盛り上がるネタが、学校から東岡崎駅に向かって帰る坂の横道の話。付き合っている同士が仲良く歩くその道を、そんなことに一切縁のない人たち（含む私）がうらやましくメインの道側から見ているという話。これは世代を超えて通じる普遍的なネタなのでしょうか？



高46回同級生（筆者は左端）

高58回 鳥山 順丘

総会への初参加は、まだ大学生の2007年でした。すぐに音楽会に加入

し、尺八を持つて毎年欠かさず10年間総会に参加してきましたが、2017年に愛知県にUターンして以来、今回は実に5年ぶりの総会です。遠距離のため不参加が続いてしまいましたが、今回は新日本紀行（富田勲作曲）を再演すると聞き、思い切って参加を決めました。思い出深いこの曲ならばと俄然気合が入り、本番でも今できる精いっぱい演奏ができました。手前味噌ですが、演奏にご満足いただければ幸いです。

久しぶりの懇親会での会話も楽しく新鮮でした。着席となったことで隣り合わせた初対面の方ともじっくり時間をとって話をすることができました。また学生時代からお世話になっている音楽会・山の会の方々と旧交を温めることができました。

大所帯の会ですが、この会で出会う方はどの方も岡高出身だと思いつつ何の垣根もなく、懐かしさを感じます。昨今、これまでどおりに運営していくことは大変なご苦労があるかと思えます。温かい場をつないでくださる会の皆様、世話人の皆様に感謝申し上げます。



高58回同級生（筆者は左側）

高70回 柘植 武蔵

岡高を卒業して4年もの月日が経っていたが、同期の友人に声をかけられて、今回初めて首都圏段戸会総会・懇親会に参加させて頂いた。久しぶりに会った同

期は在学時とあまり変わらない様子で、ノスタルジーを感じた。ところで、このノスタルジーという言葉はしばしば進歩への足枷や現実逃避といった否定的な文脈で用いられる。しかし、私にとってはむしろ逆で、岡高での経験や岡高で築いた交友関係が今の自分を支えてくれている。特に岡高の教育目標は強く印象に残っている。「たかい知性ゆたかな情操たかましい心身を兼ね備えた国家・社会の有為な形成者を育成する。」

今回、野口謙吾さんのご講演の中で「一億総養殖系」というお話があった。多くの人がただ与えられた餌を得て幸せな生活を送り、自分さえ良ければいいと満足するだけ。岡高の教育目標に記された姿勢は、このような利己的な考え方に異を唱え、自身を高めるとともに、他者や社会のために動くことのできる人であろうとするものではないだろうか。

懇親会でお話を伺った先輩方は各方面でご活躍をされ、まさにそのような人物像を体現した方々ばかりで、自身の未熟さを思い知った。そして首都圏段戸会という場それ自体が、偉大な先輩方のご経験を後輩に伝えるといった意味で、他者のためにあらんとする精神性を表したものであるようにも感じられた。このような素晴らしい会を企画、運営してくださった先輩方に感謝申し上げます。



高70回同級生（筆者は左から2人目）

令和4年度会計報告・監査報告

会計及び会計監査の方々のご尽力により、令和4年度会計報告・監査報告がまとまりましたので、ご報告いたします。
 なお、会計報告・監査報告は、次回首都圏段戸会総会（令和5年10月28日開催予定）において、会員の皆様の承認を経て確定します。

貸借対照表

令和4年12月31日現在		(単位：円)	
科 目	金 額		
I 資産の部			
通常貯金	1,497,304		
振替口座	390,246		
資産合計		1,887,550	
II 負債の部			
未払金	0		
負債計		0	
III 正味財産の部			
正味財産		1,887,550	
負債及び正味財産合計		1,887,550	

収支計算書

令和4年1月1日から令和4年12月31日まで		(単位：円)	
科 目	金 額		
I 収入の部			
運営協力金	1,416,000		
總會協力金	694,000		
日取協力金	188,000		
受取利息	11		
当期収入合計		2,298,011	
II 支出の部			
10月總會懇親会費用	880,245		
会報費	1,028,960		
ホームページ維持費	5,940		
後納郵便料	38,995		
ゆうちょ手数料	2,316		
運営協力金振込手数料	25,608		
世話人会費	4,950		
当期支出合計		1,987,014	
当期収支差額		310,997	
前期繰越収支差額		1,576,553	
次期繰越収支差額		1,887,550	

監査報告書

首都圏段戸会の令和4年度（自
 令和4年1月1日 至令和4年12月31
 日）の計算書類は適正かつ正確で
 あることを確認いたしました。

令和5年1月21日

会計監査 戸田 譲三

第50回首都圏段戸会総会・懇親会出席者（令和4年10月開催）

(高6回)	長瀬けい子	杉山修美	(高21回)	細井土夫	矢吹清	(高38回)	柴田哲良	中西和幸
(高7回)	市川定毅	三井豊	(高22回)	山上田邦	新庄弘之	(高40回)	大井田陽	村俊哉
(高9回)	高津治子	今井哲夫	(高25回)	戸田洋三	戸田利彦	(高41回)	大磯重徳	木白井利昌
(高11回)	青木かゑ子	永田宏	(高26回)	安内藤幸	織中嶋克宜	(高43回)	鴻池内未	松尾直樹
(高12回)	太田部栄	鶴田文男	(高28回)	堤服三訓	中嶋誠子	(高44回)	竹浅井太	大竹内達也
(高13回)	藤田彰弘	磯尾進修	(高30回)	天野輝義	岡本和也	(高46回)	佐藤川高	石川高子
(高14回)	天野輝義	鈴木弘恵	(高31回)	大中山達	小林淳将	(高47回)	石川義敦	鳥山順
(高16回)	大中山達	鈴兵弘善	(高32回)	武藤隆子	高原えつ	(高50回)	石川航太	山浦綾
(高17回)	大武藤隆	山加藤正	(高33回)	伊藤博久	小出一典	(高57回)	本多健太	今西楓
(高18回)	伊清藤博	都築正行	(高34回)	山内久雄	井上由美子	(高58回)	加藤優子	
(高19回)	山内久雄		(高35回)	鈴木美季	小川伸介	(高60回)	阿部孝太	
(高20回)	福野隆太	神尾由恵	(高37回)	清水徹				

令和5年度 首都圏段戸会 世話人名簿

(高2回)	服部登	情報
(高3回)	丹羽鼎	企画
(高6回)	有馬弘政	会長
(高7回)	是津定厚	
(高8回)	田中厚生	
(高9回)	岡田敏夫	
(高10回)	宇佐美栄	
(高11回)	太田文男	
(高12回)	永田成瀬	
(高13回)	中浩	
(高14回)	磯谷鏡子	
(高15回)	神谷国広	
(高17回)	満江信正	
(高18回)	伊田博子	
(高19回)	山田邦宏	
(高20回)	伊音部昌久	
(高21回)	福山隆太郎	
(高22回)	天野貴典	
(高23回)	辻村山邦夫	
(高24回)	内山恵子	
(高25回)	小栗文子	
(高26回)	山上洋子	

(高23回)	新野山	弘之	会計監査
(高25回)	野田寛	三彦	事務局長・企画・広報
(高26回)	内田利光	田雄平	会計
(高27回)	織田洋枝	長三彦	会計
(高28回)	岸崎津井	酒邦彦	
(高30回)	米津智	石満正	副事務局長・企画
(高31回)	高原間由	岩内友二	副事務局長・会計・企画
(高32回)	堀出祐	小本岳	企画
(高33回)	山板敏正	鈴木美季	副事務局長・企画・情報
(高34回)	山板美子	井上由美	副会長・企画
(高35回)	糸井美季	菅伸介	広報・書記
(高36回)	平松理生	稲重浩	副事務局長・会員
(高37回)	西川智基	中幸司	会計
(高38回)	中西武利	大田秀子	企画
(高40回)	立山利子	山鉢朋子	企画
(高41回)	長野麻妙	五十嵐	副事務局長・書記
(高42回)			広報
(高43回)			

(高44回)	松尾直樹	企画
(高45回)	筒井貴之	情報
(高46回)	西浦朝博	情報
(高47回)	大川いづみ	情報
(高49回)	杉本さおり	情報
(高50回)	丹羽居福	情報
(高52回)	鳥居水雄	情報
(高53回)	清佳貴直	情報
(高54回)	石井康	企画
(高55回)	辻安藤	企画
(高56回)	加藤尚博	企画
(高57回)	石川敦也	企画
(高58回)	石川亮	企画
(高59回)	嶋田亮	企画
(高60回)	本多健太	企画
(高61回)	鈴木綾貴	企画
(高62回)	栗津文香	企画
(高63回)	河原宏太	企画
(高64回)	鈴木康啓	企画
(高65回)	扶瀬聡史	企画
(高66回)	横加史	企画
(高67回)	横加史	企画
(高68回)	横加史	企画
(高69回)	横加史	企画
(高70回)	横加史	企画

50歳での キャリア・チェンジ

高42回 長野 麻子

高校を卒業後、32年間を東京で暮らして人生折り返しに50歳を迎えた時、林野庁木材利用課長として各地の森を訪れ、すっかり森と木の魅力にハマってしまいました。

日本は森林が国土の約7割を占め、スウェーデン、フィンランドに次いでOECD加盟国中3位の高い森林率を誇る森の国です。この豊かな森は、私たちにおいしい空気や水、リフレッシュできる環境を提供し、山が崩れるのを防ぎ、文化や景観を形作っています。樹木の二酸化炭素吸収による地球温暖化の防止やたくさんの生き物を育む生物多様性の保全にも大きな役割を果たしています。これは貨幣価値に換算すると年間70兆円を超える生態系サービスと言われ、私たちは森から無償でこれらの恩恵を受けているのです。

人類は森から生まれました。私たち日本人もかつては、生まれたら木桶で産湯、薪で料理をし、木の箸と器で、木樽で熟成した酒や味噌・醤油を食し、木のお風呂に入り、木の家に住み、木の棺桶で見送られるなど、森とともに暮らしていました。しかし、今や化石資源を使った便利な生活のかげに木のある暮らしは遠のき、街と森の距離は遠くなり、森への関心は失われてしまいました。私たちが今目にはしている森は、先人が戦後はげ山に一齐に植林をして育ててくれたものが大きく成長したもので、先人が見たくても見られなかった緑の風景です。50年を超

える木が半分以上と利用期を迎えている一方、林業の衰退や木材価格の低迷から伐採後植林される面積は3割と少なく、森林の少子高齢化が進み、山を守る人も減っています。このままでは、先人から受け継いだ豊かな森を次代につないでいくことはできません。

そんな危機感と勝手な使命感から、28年間勤務した農林水産省を2022年6月に早期退職し、8月に日本の森を盛り上げる「株式会社モリアゲ (<https://moria-age.jp>)」を起業しました。国の役人として、木材利用を一層促進するための法律の改正や民間企業を巻き込んだ国民運動に携わっていましたが、森と街、官と民、政策と現場を横断的につなぐ人材が不足していると感じ、私のこれまでの経験とネットワークで現場のお役に立ちたいと考えたのです。役所時代は課長どまりでしたがキャリア・チェンジで社長に昇格し、上司のいない自由な身で、各地の森をめぐる生活を満喫しています。木と森にハマった私にとっては、仕事と趣味が一致した幸せな毎日です。

課題山積にみえる森林ですが、嘆いても森はよくなりません。技術も進歩して追い風も吹いてきており、日本の森林には可能性しかないと確信しています。



福井県池田町の森で
モリアゲポーズをする筆者

2050年カーボンニュートラルやSDGsの土台となる自然資本の持続性向上に向けて、森林に資金を回すとともに、木材を建築に使い、建物に炭素を固定して街を第2の森林にすることにより、「伐って、使って、植える」森林の循環を各地で進めていくことが大切です。人間の活動は、自然が回復するよりもはるかに速いスピードで自然を破壊しており、コロナウイルスの流行は、自然のバランスが崩れて社会を不安定にしていることを示す警告と感じています。身近な自然である森の価値を高め、人と森の接点を積極的に作っていくことにより、自然に生かされていることを認識し、人と自然が共生する社会に貢献していきたいと思っています。最近では、森のようちえんや森林浴（実は日本発祥の言葉で、世界でShinrin-yokuと通じます）、トレイルラン、ワーケーション、企業研修の場などとして森林空間を活用する森林サービス産業の可能性も広がっています。森林の中では都市と比べて、リラククス状態を示す副交感神経活動が高まり、ストレスホルモンが下がるというエビデンスも出てきています。企業研修を都市から森でやることに変えた会社では早期離職率が大幅に低下したという事例もあり、森の恩恵を受けているすべての企業が森と関わり、関わっていくことが期待されています。

岡崎市は旧額田町との合併により、地域の6割を森が占める森林都市になりましたが、岡崎の森も日本の森と同様、林業が衰退し、人工林の4分の1が放置され、手入れ不足が否めません。この状況を打破すべく、2022年2月には、岡崎の森と街と人をつなぎ、里山での幸せな暮らしの実現を目指す地域商社「もり

まち」(<https://morumachi-okazaki.jp/>)が設立されました。私も今年から岡崎市森林活性化アドバイザーを拝命し、高校時代を過ごした故郷の森のために働けることになりました。高校卒業以来、故郷を遠くで想う生活を少し後ろめたく感じてきたのですが、キャリア・チェンジにより、ようやく恩返しできる機会をいただきました。「国土の7割が森」の日本で、「人口の7割が森を想う」未来を創ることがモリアゲのミッションです。岡崎高校OB・OGで山主の皆さん、森に興味がある皆さん、故郷に恩返ししたい皆さん、一緒に岡崎の森をモリアゲていきましょう！

ペンションの便り

高54回 加藤 直也

コロナ禍の真只中、2021年7月より、アメリカ・ワシントンDCにて国際通貨基金 (International Monetary Fund, IMF) のエコノミストとして勤務しています。3年の期限付き職員という形での在籍ですので、この1月でちょうど任期の折り返しを迎えたことになりました。渡米以来、首都圏段戸会に直接関わることは難しくなりましたが、今回折角このような記事執筆の機会を頂戴しましたので、コロナ禍でのアメリカの生活、国際機関での勤務を通じてこれまで感じてきたことなど、この1年半の間の経験をお伝えできればと思います。

米国滞在は、10年前のアメリカ・ノースカロライナでの留学生活以来、2回目



ホワイトハウス前のツリーとワシントン記念塔

となります。今回は、勉強ではなく仕事
が生活の中心であること、また家族と
もに赴任していることもあって、以前に
も増して日々の生活それ自体が新たな経
験となっています。首都ワシントンDC
の機能的かつ整然とした街並みと、随所
に公園や緑地が整備されて、暮らしと政
治機能の中枢が綺麗に両立している点は、
物価水準こそ肌感覚でおよそ日本の2倍
ながらも、豊かで余裕のある暮らしをも
たらす源泉となっているように感じます。
また、国際機関や各国の大使館が数多く
所在していることもあって、各国の季節
毎の催しが街に彩りを添えるとともに、
子どもたちの通う学校もアメリカ国籍以
外の人の方が多いなど国際色豊かな点も、
これまで暮らしてきたどの街よりも刺激
的です。

当地でもコロナ禍は様々な面で世の中
を大きく変えてきています。連邦政府も
含め在宅勤務が広く浸透したことで、場
所や時間にとらわれない形で仕事をする
人が増え、ホワイトカラー業種を中心に
フレキシビリティが高まったと感じてい
る人は格段に増えているようです。また、
サービスのデジタル化・非対面化が定着

したことで、何事もまず電話や対面で交
渉が必要だった10年前と比べると、携帯
のアプリ操作で全てが完結する今の生活
は驚くほど便利です（その分、英語力向
上の機会が奪われているかもしれません
が）。一方、こうした変化の裏で生じて
いる格差拡大も顕著で、ワシントンDC
の中心部では、レイオフで職を失った多
くの人たちがテント生活を続けていま
すし、オフィス街の路面店や郊外の大規模
モールで閉店が相次いでいる点などは、
コロナ後の社会の分断と未だ不十分な回
復を如実に表しているようです。

こうした社会の大きな変革期に、20年
前の岡高在籍当時には想像もしていな
かったIMFで勤務する機会を得られた
ことは、とても貴重な経験なのかもしれ
ません。政治経済の教科書のような説明
で恐縮ですが、IMFは、加盟195カ
国の経済情勢や国際的な資金のやり取り
に問題がないかを監視（surveillance）し、
資金融通に問題のある国に融資プログラ
ムを実施（lending）するともに、必要
な技術支援（capacity development）を
行うことを使命とした国連の専門機関の
一つです（日本は出資金規模で見て第2
位の出資国）。私は現在、低所得国（そ
の多くはサハラ砂漠以南のアフリカや、
中央アジアに所在）の貸出に関する政策
を管理する部署に所属し、そうした国が
直面するグローバルな政策課題（最近だ
と、ウクライナ危機を契機とする資源価
格高騰や食料不安、インフレ）への対応
や、そうした国への融資審査を担当して
います。また、西アフリカ・シエラレ
オネに対する融資審査団にも参加し、定
期的に現地へ赴き、現地の財務省・中央銀
行と交渉を実施しています。渡米前は日

銀で日本の景気動向や金融システムの調
査に携わってきました（今回のIMF勤
務も、日銀からの出向という形で実現し
ています）が、今の仕事は、対象が日本
から世界・低所得国に広がるとともに、
課題の洗い出しだけでなくそれに対する
対処策の策定と貸出の実施にも関わるこ
とができるという意味で、より醍醐味の
大きいものです。また、各国から多様な
バックグラウンドを持った同僚（そのほ
とんどがPhDを有したエコノミスト）
が集まる職場でデータに基づく分析結果
をもとに互いの意見を自由におつけられ
る環境は研究機関のようでもあり、些細
な点の調整に終始するのではなく、大局
的な観点で政策効果が一番効果的となる
方法を模索する組織文化は、日本での仕
事にも大いに参考になるものがあるよう
に感じます。

こうした中、国際社会に対する見方の
アップデートを迫られる機会が多いこと



シエラレオネ首都フリータウンの街並み

も、新たな発見です。例えば、シエラレ
オネの名前を聞いたことがある日本人の
多くは、同国を内戦やエボラ出血熱など
を通じて、いわゆる後発途上国として認
識することが多いかと思っています。確かに
今でも貧困率は高いですが、例えば携帯
電話普及率は9割を超え、人々はモバイ
ルバンキングで決済を行うなど、日本が
数十年かけて経験してきた変化をもの
数年で達成するなど急成長を遂げていま
す。新技術の受容を通じて経済を一足飛
びに発展させるという動きは他のアフリ
カ諸国でも生じており、途上国はもはや
一昔前の「途上国」ではないのだと痛感
します。一方で、国際社会におけるブレ
ゼンスの中で「日本」に対する各国の関
心が相対的に低下してきているように感
じる点は、懸念すべきなのかもしれませ
ん。ここ数年、IMFの世界景気に関す
る公表物の中では、日本に関する言及が
少しずつ縮小されてきているように感じ
ます。少子高齢化のもとで、経済規模の
相対的な縮小には抗いきれないものもあ
るかもしれませんが、そうした中での経
験を積極的に発信していく取り組みもよ
り重要になるように思います。

管楽器をもっと身近に！

私はサクソフォン奏者としてコンサー
高64回 柳下 柚子

トや教育活動を行いながら、東京藝術大学で管楽器の教育法について研究しています。特に、ヨーロッパの教育法を参考に、楽器を始めたばかりの人にとどのような練習法が適しているか調査しています。意外に思われるかもしれませんが、日本の音楽大学では自分の専攻の楽器を「どう演奏するか」は教わっても、「どう教えるか」はほとんど教わりません。多くの学生が卒業後に子どもからシニア世代に至るまでの教育に携わるにも関わらず、大学での教育はプレーヤーとしての能力を伸ばすことに焦点が絞られることが多いです。私自身社会に出て生徒を指導するようになり、学習者の課題を見定め、様々な教材や練習方法から最適な学習計画を提示するスキルの必要性を強く感じ、この研究を始めました。

管楽器といえば、多くの方が学校の吹奏楽部をイメージされるかと思いますが、（私は高校時代部活をやっていませんでしたが…）この吹奏楽という文化の浸透により、良くも悪くも日本では管楽器は早くても小学校高学年から、という認識が広まりました。一方、フランスやドイツでは通常より小さい子どもサイズの楽器を活用して、6歳から管楽器教育がスタートします。音楽といえは何かとお金がかかるイメージがありますが、ヨーロッパの音楽院の多くは日本よりも学費が随分安いのです。例えばパリ市内では、私たちが近所のピアノ教室に通うような値段でレッスンを受けられるので、夕方学校が終わるとたく



さんの子どもたちがやってきます。さらに、音楽院の先生たちは日中はプロの演奏家を目指して世界各地から来た学生の指導をしている一流プレーヤーです。なんとも恵まれた環境で羨ましい限りですが、子どもたちはつゆ知らず…大抵は「何か一つくらい楽器がやれた方がよいよね」という両親の意向で通っています。週一回のレッスンは次のレッスン（楽器ケースを開けるのは次のレッスン）家で練習してこないという意味がないのに！というところが日常茶飯事なので、私も視察に行つて大変驚きました。演奏技術に限って言えば、毎日部活動で練習している日本の子ども達の方が上手かもしれません。それでも「何か一つくらい楽器を」と考えた時に、ピアノやヴァイオリンといった楽器と同じように、サクソフォンなどの管楽器が選択肢にあることをとても素敵に思いました。また、教育需要の高さから初心者向けの良質な教材がたくさん出版されていることも大きな魅力の一つです。

このようなヨーロッパの教育を日本でも導入するプロジェクトを、昨年から東京都内で始めました。使用しているドイツのメソッドは日本人の体格や言語の発達、学習環境に沿った形にっており、最初はストローや紙風船など身近なもので遊びながら、自然と楽器演奏に必要な筋力を身につけられるようにしています。こうして子どもの適性を見極めながら、数ヶ月かけて小さいサイズの管楽器に移行していきます。また、ドイツの教育では口腔機能療法（MFT: Oral Myofunctional Therapy）と



子ども用サクソフォンで児童を指導する筆者

いう口周りの筋肉を鍛えるために行われる歯科の訓練も組み込まれています。日本でも「あいいうべ体操」などがよく知られています。日常的に口がぽかんと開いてしまう子どもや、高齢者の誤嚥性肺炎を予防するために行われる訓練です。最近ではマスク生活によって、大人でも気がついたら口がぽかんと開いてしまっている人が多いそうなので、管楽器の演奏に関わらず、たくさんの方にお勧めしたいです。このような練習方法により、就学前の身体の小さな子どもでも学習開始から3か月程度で音が出せるようになっていきます。今後は同様のプロジェクトをシニア世代の生涯学習やフレイル対策として活用することも計画しており、これから成果がますます楽しみなプロジェクトです！

私たち音楽家はこのコロナ禍で厳しい日々を過ごしてきました。私は教育現場でのコンサートが多いので、感染拡大の度にスケジューリングは真つ白になり、レッスンもパーテーション越しで思い通りにできないことが続きました。勤務している音楽科の高校ではリモートでの授業も行いましたが、繊細な音色や音量を伝えるのはとても難しく、どうしてもレッス

ンの質が下がってしまっています。当たり前のように演奏したりレッスンをしたり、海外に行つて研究していたことのありがたさを痛感する毎日でしたが、ここ一年ほどは少しずつ以前の生活を取り戻してきました。今年は久しぶりに地元愛知県でのコンサートも予定しており、いつも通りの日常に改めて感謝しながら、ますます色々なことにチャレンジしたいと思っています。この記事で皆さんが少しでも、管楽器に興味を持ってくださったり幸いです！楽器を始めてみたい方がいらつしやれば、ぜひ何でもお尋ねください。

段戸サークル活動報告

副業推進会

高30回 加藤 研一

武士は二君に見えず。長らく日本の社会は副業をタブー視してきました。しかし副業こそが閉塞感溢れる日本経済を活性化する鍵となるのではないかと。我々はこの仮説を実証すべく、段戸サークル『副業推進会』を立上げました。最初の試みとして『胎動を始めた副業社会に我々はどう対処すべきか』と題した懇談会を開き、まず私から以下のような話題を提供しました。

1. 私の副業初体験

2015年から私は「二足の草鞋」を履きはじめました。サラリーマンで



懇談会（筆者は右列後ろから3人目）

ありながら、他企業の社外監査役に就任したのです。当時は副業が禁止されていたため、承認を得るには大きな障壁がありました。

2. 副業に関する裁判事例

かつてのモデル就業規則には「許可なく他の会社の業務に従事しないこと（第11条第6号）」という項目がありました。多くのサラリーマンが副業を理由に解雇され、裁判に訴えています。

3. 副業を解禁した先進企業

安倍内閣は2018年、働き方改革の一環として副業を解禁します。改定されたモデル就業規則により、「労働者は勤務時間外において、他の会社の業務に従事することができる」となりました。多くの企業では先進的な副業施策を推進しています。

4. 副業から福業へ

恐縮ながら、再び自身の経験をご紹介します。積水化学退職後も兼松エレクトロニ

クスの取締役を務めながら東京大学や徳島大学で客員教授として大学発ベンチャー創出の任務についています。2021年にはミステリー風企業小説「こちら副業推進部、事件です」（筆名阿部孝二 <https://abeozy.com/>）を上梓し、作家デビューを果たしました。

5. 副業マーケットへ宣戦布告

副業に就くための履歴書の書き方や、人材会社の活用法を紹介しました。

後半は旨い酒と料理に舌鼓を打ちながら、喧々譁々のプレストが展開されました。幸いにして首都圏段戸会には多種多様な人材が溢れています。本会は同窓会発イノベーションを目指して参ります。

山の会

高30回 石川 定雄

令和4年の山の会はコロナ禍前に近いペースで、春は上州の荒船山、夏は加賀の白山、秋は信州蓼科山への山行を行いました。荒船山では、霧雨に濡れる幻想的な頂上台地を散策し、白山ではあちこちに広がるお花畑に心を躍らせ、蓼科山では霧氷と紅葉と青空に迎えられ、且、下山後恒例の温泉、蕎麦を満喫できました。加えて、晩秋には新企画として「東京散策ツアー」を開始しました。

秋の初め頃、「東京散策ツアー」を山の会でやらないかという話が出たときは、普段の生活に少々毛の生えたようなイベントに参加者が集まるかどうかという不安もありましたが、「山はちよつと」という人も引っぱり込んでワイワイできたらいいなと、すぐその気になってしまい、幹事メンバーも全員賛成してくれたので、兎に角やってみようという準備を始めました。第1回目「東京散策ツアー」はいつものメンバー、



秋蓼科山山頂にて

このところ山ではご無沙汰気味のメンバー、新しく参加のメンバー、合わせて9名に参加頂きました。ガイド役を引き受けてくれた内山田会長から、国分寺駅出発前に事前知識として散策コース上に見られる「国

分寺崖線」について、その地形やそれが歴史にどのように影響したのかをレクチャー頂き、散策中も随所で地形や史跡などの説明を頂き、これまた興味深く、参加者同志も道中いろいろな会話を楽しみ、リアルに有意義な時間を過ごせたと思います。関東ローム層などは地理の授業で知っていても、国分寺崖線は知らない方も多いと思います。一言で表わすと、国分寺から多摩川沿いに田園調布の方まで段差のある地形がずっと続いており、それに沿って多くの「史跡」や豊富な「湧水」がある場所のようです。また、今回は開催時期を紅葉の時期に合わせることで、史跡などを飾る樹々の鮮やかな紅葉や、グラデーションに心も癒され、何か気持ちも若返ったような気がしました。春には、次の場所で2回目を開催予定です。

新企画東京散策ツアー
国分寺駅出発（筆者は前列右端）

編集後記

本号では、まず定番となる総会特集をお届けします。コロナ禍が続くなか、総会は前回同様ハイブリッド形式での開催でしたが、懇親会については「会場で！」という声が数多く寄せられ、3年ぶりとなる対面式を実現しました。参加者数はコロナ禍前の水準には届いておりませんが、同級生と久闊を叙する絶好の機会になったと思います。今回も高6から高70まで幅広い世代からの出席があり、石川さんに全体報告をいただくとともに、各世代を代表して7名の方から「出席者の一言」を頂戴しました。

後半ではさまざまな分野で活躍の方々を取り上げました。まずは国家公務員を早期退職し、起業された長野さんです。早くも各地で「モリアゲ」講演をされ、会報にも熱い思いが綴られております。続いて米田君が在学中の加藤さんからレポートをいただきました。エコノミストとしてきわめて貴重な経験をされていることが伝わってきます。三人目はサクソフォン奏者の柳下さんです。柳下さんは演奏者として活動する傍ら、教材製作等にも携わっております。今回は教育指導の視点から寄稿いただきました。

最後に新設の副業推進会、山の会から活動報告をいただきました。いずれも斬新な取組みを企画されており、関心のある方はぜひ幹事までご連絡願います。（織田）